

思いやりー共同感情ー

中野 貴仁* 荘司 泰弘

Fellow Feeling

ーGemeingefühlー

by

Nakano Takayoshi* SHOUJI Yasuhiro

(Received December 2, 2002)

キーワード：共同感情 思いやり やさしさ 異年齢同集団

1. はじめに

私が小学校の講師という立場で学校に勤め始めて、1年の月日が流れた。私は1年間に、当時4年生の子ども達を1学期間、元3年生の子ども達を2・3学期間、計7ヶ月と今年度の4年生の担任として子ども達と接する機会をいただいた。子ども達と毎日の生活を過ごしていくと、分かり切っていることではあるが子ども達は、一人ひとり違う性格をして、異なる個性を持っており、集団の中で生活を共にしていた。子ども達の個々の個性は、一人ひとりすばらしい面をいくつも持ち得ていることを確認できた。クラスの子供達とたくさん時間と生活を共にしていくことで、お互いが認め合い、分かり合うことができるようになってくる。私は、そこに一つの感覚でしか感じられない感情が存在していると考ええる。感覚でしか感じられない感情は、普段、教師として学級経営や事務的処理、校務に追われ、忙しい毎日の生活を送り、いつも自分の意識としてはっきり認識するわけではないが、無意識のうちに感じる事ができるのである。私が無意識のうちに感覚として感じているものこそ、フレーベル (Friedrich Fröbel 1782-1852) の論述している「共同感情」(das Gemeingefühl) ではないかと考えている。人間は無意識のうちに感じられる共同感情の中で互いが生活をする事により、互いの存在を認め、互いに生きていくため糧を身に付け共同体に関わっていける。お互いが共同体の中で関わっていくことから、人間は相手を思いやる感情が芽ばえろと考えている。今回の論文では、共同感情の中にある万物がお互いに影響し合う状態から萌芽する思いやりを実践例を交えて述べていく。また、保育者や教師が子どもにどのように接していけばよいかも論述していく。

2. カイルハウ学園のクリスマス

カイルハウ学園のクリスマスには、共同感情を生み出すいくつかの要素がフレーベルの手によって実践されている。「最初、クリスマス祭は一八一六年に〔この教育集団〕全体の創始者フリードリッヒ・フレーベルと五人の従兄弟たちによって、カイルハウの西方四時

*宇美小学校講師

間のところにあるイルムの村、グリースハウスにおいて催された^(7-a)と伝えられているクリスマス祭には、万物が目指すものが示されている。万物が目指すものとして、3つの合一が挙げられる。一つは、「自己との合一」であり、もう一つは、「世界の合一」であり、最終的に人間は、神に憧れ神に近い存在になろうとする「神への合一」である。

自己との合一とは、自己合一の最初の段階は、感官の伸張から始まる。子どもは感官の伸張によって自己の内界を伸張し、内界外界の両者の統一を見出すことという人類の使命により、外界と接点を求めようとする。フレーベルは指摘している。ゆえに、外界との接点を求めるにあたって子どもは、四肢の成長を始めていくわけである。また、自己の合一では、四肢の発達に関しても関係を持っている。フレーベルが「外界の事物のうちには、どちらかといえば、近いところに静止していて、したがってこれに対する者にも静止の態度を取らせるような傾向のものもあれば、またどちらかといえば、次第に遠ざかりつつ動いていて、したがってこれに対する者には捉えたり掴まえたり取り押さえたりするような態度をとらせる傾向のものもある。また最後に、あるものは動かず遠い場所、離れた距離に留まっていて、そのためにこれに対する者には自分へ近づけようとの考えを起させる^(6-a)と指摘する感官の伸張と共に四肢の発達は、人間の本質を認め、内界との関係を承認されようとの要求にしたがいながら、内界外界の両者の間に統一を見出そうとすることを意味しているのである。しかし、感官の伸張と四肢の発達だけでは、内界外界の両者の間に統一は見いだせない。人間の精神的発展も必要になる。子どもは自らの力によって自己を外部に表現し、自己の内面を知ろうとする精神的な発達が行われているとフレーベルが指摘しているように、自己の内面を認識することは、自己の自我が表出してきたことであると言ってもよい。自我が表出すると子どもは、外界において自己を確認する行為を行う。外界における自己の確認行為が、「微笑」(das Lächeln)であり、遊びである。子どもは微笑や遊びを通して、外界への接点を求めていき、人間は肉体(感官)と精神(自我)との発達、伸張、調和によって、外界に対し自己の確認を行うことができるのである。したがって、外界との確認において自己との合一を成し得た子ども達は、身近な者からの世界へと合一していくことになる。

自己との合一の次の段階として世界への合一がある。世界への合一は、子どもが、自分の身近な社会に所属しようとする行為から始まる。社会への所属を願う行為として微笑がある。微笑を行う子どもは、身近な存在である母親に対して所属感を求め、子どもは、徐々に家族の一員として身近な社会に所属していく。園児になると、子どもは遊びを通して異年齢同グループの中に入っていき、幼稚園という社会生活に所属していく。子どもは自分の存在を確認し、表現することで、身近な社会に所属していき、徐々に地域社会、国家、人類、万物である人間と大きな社会全体の中に所属していく。自己を社会全体に所属していくことにより、子どもは自分が万物の中で一部分をなしていることに気づき、すべての万物の中に自己の存在を拡大していく。徐々に万物との確認を果たしていった子どもは、万物すべてのものに生命があり、自分を含めて万物は、対等な存在であることを認識していくようになる。生命あるものと自分との関わりを感じた子どもは、生命を持ち得ることへの感謝を感じるようになる。フレーベルは、世界への合一によって、子どもは自己の「生命(das Leben)と他の生命との存在(das Sein)の関係を確認することを指摘し、生命と

して自己を表現し、存在の知識や意識を高めようとすることを論じている。

フレーベルが、「つまりいたるところに、ひとつの精神、ひとつの心、ひとつの生命があらわれているからである」^(7-b)と結論しているように、万物すべての物に生命が宿っていることを確認することで、人間は万物全体の一部であり、全体を構成している一部であることを子ども達は認識するのである。万物全体の一部を確認した人間は、神の精神によって共通した感情に気づき始める。すなわち、万物の一部としての万物全体に共通する感覚を確認できるようになる。フレーベルは、神の被造物である万物が共有する感覚を共同感情と呼んだり、神への「憧れ」(die Sehnsucht)と表現したのである。

最後に、クリスマス祭で「子どもの本性における純粋なるものを、明白に繰り返し是認し、子どもの本性の発展を、単なる課題とするのみでなく、義務とせしめるのであるから、ここにおいては特に、発展的で、教育的な人間陶冶の法則はその最も純粋な本質において、イエスの世界観、真正にして、純粋なるキリスト教の世界観と、全く一致しなければならない」^(7-c)と述べられているように、クリスマス祭で神の永久不変の法則が影響を及ぼし、人間は神に共通した憧れを抱くようになる。フレーベルは、すべての万物に、永久不滅の法則が存在しており、すべての万物を支配していると述べている。永久不滅の法則は、外界と考えられている自然から人間の内界と捉えられている精神に至るまで、浸透している法則であり、内界と外界を統一している生命においても永久不滅の法則が、明瞭に現れている。内界と外界を統一する生命に永遠の法則が影響しているということは、神が、人間を創造のもとに形成された時に、人間の外観に関してだけでなく、精神的な内面に関して神の創造した観点が永久不滅の法則に沿って成り立っていることになる。神の永久不滅の法則とは、万物すべての中に、神が存在し、神の性質、言い換えれば、神性が働いていることを意味している。「神がうちに働いていることによってのみ」事物が存在すると仮定するならば、人間などの万物は、神から創造された万物であり、神が人間の内界に深く関わり働きかけているということになるのである。フレーベルは、「内界を表現し外界となし、外界を摂取して内界となし、両者の間に統一を見出すこと、これが人間の使命の現われる一般的外的形式である。それゆえにまた、どの外界の事物も、その本質を認められ、その内界との関係を承認されようとの要求をもって人々の前に現われてくる」^(6-b)と論じて、永遠の法則を自分自身の教育観の統一思想に含めていった。すなわち、フレーベルは統一思想のあり方を、「内的統一」(die innere Einheit)に求めていたのである。内的統一を求めるフレーベルの理論は、すべての万物が、神への憧れを持っており、神に向かうことを念願していると考え、「生命合一」(das Lebenseinheit)という教育思想を展開していった。子どもの成長段階が低いところから、高度の成長へと変化を織りなしていく時、子どもは、生命合一するために三つの順序を織りなし、進んでいく。

クリスマス祭において行われた子ども達の3つの合一は、フレーベルの神の精神の継承である考えの生命合一を示しており、生命合一の教育的考えを元に、三位一体の自己確認により、同じ万物の世界で、統一しようとする生命統一の使命を萌芽させていくことができるのである。フレーベルが、「特に人間の生、全体や統一としての人類の生、同様に部分的全体としてのあらゆる個人的生に、より多く優先して適用されるのである」^(7-d)と述べて

いる点からも証明できる。すべての万物から「共感」(die Sympathie)を感じ取り、すべてを統一する感情、共同感情が芽ばえると考えられる。

クリスマス祭という一つの共同的な催しが、「愛や子どもの幸福という親密な共同の生」に向かって、生の合一を行い、ひいては、神への合一を目指そうと試みるものであったからである。神の精神は、全人類、個々の民族、小さな共同社会に至るすべての万物において、善や愛、真理、智慧における統一により、神の影響を受けた目標が生じる。つまり、生きとし、生けるものが共に共同の中に存在する意義を見出し、人間が目指すものへと憧れを抱く時こそ、お互いの目指す方向性を確認し、互いの痛みや喜びを理解できるのである。

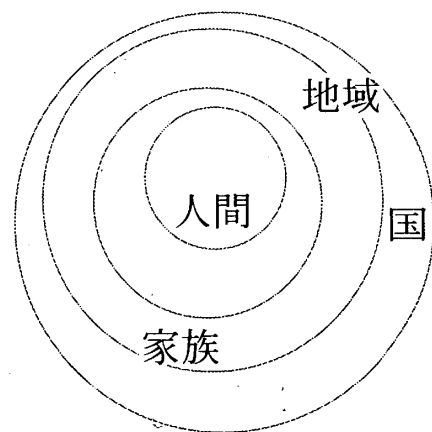
人間も含めたすべての万物が、神への合一を憧れ、万物との関係において人類が万物と共同感情を表現するからこそ、人類は絶えず自己を生成進行し、発達していくことが可能になる。フレーベルが人間教育の最終目標とした「生命化」(das Erlebung)は、神への合一によって果たされるのである。フレーベルが、「人間は、いな人間のうちになる人性は、外部的に現れたものとして見れば、決してすでに完全に現われた、完結したもの、すでに固定し確立したものと見られるべきではなくて、むしろ、絶えず生成進行し、発達し、永遠に活動し、そして永劫無限の目標に向かって、発達と進歩の一段一段を進んでゆくものと観られなければならない」⁶⁾と人間教育における人間の発達を強調しているように、人類が、絶えず成長を続けていくための目標として、神を設定しているのである。人間が、絶えず永劫無限の目標(神)に向かって伸張していく要因は、神が人間を自己の似姿に則って創造されたことにある。芸術家の精神が作品に反映されるように、神の精神もまた、神の創造行為の模倣として人間の精神に反映されると考えられる。模倣活動として人間の精神に反映された神の創造行為は、神の精神や神の生命の息吹の表現を人間に求めるのである。つまり、人間は神への憧れから「創造的活動衝動」(der schaffende Thätigkeitstrieb)を持つようになるのである。神の精神や神の生命の息吹についてフレーベルは、人間は、自己の精神から芸術精神に至るまで、すべての精神において神との接点を忘れることができない存在であるとした。神の精神をすべての精神的側面に受けている人間は、神へ向かうことによって、他の万物とのより高い水準の精神統合(生命化)を行っていくことができると考えられるのである。

生命化の説明については、シュプラランガーが、「まず、内面的条件が満たされていなければなりません。家庭は生命の源泉と調和しており、家庭は事物の究極基盤で調和していません。生命の源泉は神、事物の究極基盤は神なのです。各存在は万物の発達段階を神的なものの生命段階として、十分深く、純粹に通過し、各段階で存在の内面的なものを積極的に表現しなくてはなりません。この形成衝動は創造的生活や表現的生活の中で自ずから満たされるのです。既に創造的生活や表現的生活については、子どもの形成力に明らかであり、自然と人間性を伴った生命合一の中で、神的な創造法則が、いわば、もう一度明らかに考察される。労作、人間性における神性の現れの行為による証明が内面的なもの生命化なのです」^(11-a)と論述しているように、神の精神に則って自己の内面を表現することを意味しているのである。したがって、フレーベルの人間教育における自己との合一、世界への合一、神への合一は、自己を高めることに他ならない。

神の精神を受けた人間は、神の子として神の精神である愛を外界に表現していることになる。しかし、人間が自己の内面を表現することができなければ、神の精神の愛を周囲に対して表現することはできない。自己の内面的なものを生命化することによって人間は、神の精神を引き継ぎ、やさしさを表現することができるのである。人間がやさしさを表現するためには、人間は生命合一を果たしながら、神へ向かうことを望み、神に向かっていかなければならない。神に向かう行為により、人間は神の精神の愛を受け継ぎ、愛の精神をもとに行為を表現していくのである。人間性のやさしさも、神の愛として考えられ、神との高い精神合一を行うことにより、萌芽してくる人間性であると言えるのである。また、神の創造活動には対立物を設定し、融合することで止揚させるという傾向がある。自然界において対立する事物を調和発展させる活動に着眼したフレーベルは、神の作品である人間には神の精神活動が反映されていると確信した。カイルハウ学園のクリスマス祭の催しの中で、「祭りがもたらした贈物は僅かではたが、すべての光が一つの明るさや、一つの輝きに融け合って光の全体性を示しているように、それらの贈物は入り乱れて樹々にぶら下がって、個々に色とりどりの受領者の名前を示していた。またそそれは深い心情においても、外面的で明瞭な直観においても、愛や子どもの幸福という親密な共同の生に、すべてのものの個々の生の合一したし、本来この祝祭の催しはその人の誕生に向けられ、またそれゆえその名を持っている人の精神に、全くふさわしかった」⁷⁾とフレーベルが論じていることから、生命化による人間の発達により高い精神統合と考えられるのである。生の合一と言われているのは、生命化のことに他ならない。

3. フレーベルの共同感情理論

生命化を行い、高い精神統一を求めるときに、共同感情が感じられるようになる。「教育の弁明」においてフレーベルは、「かれらは家族関係の中でいろいろな立場にある人々からなっている。父、母、両親という立場の人もある。兄弟、姉妹の関係にある人もいる。身内同士もあれば、友人同士の人もある。父や母、兄弟、姉妹として心と愛、身内や親族に対する愛、そして友情や友愛の心が、こうした人々を結びつけているが、それはずっと以前から結びつけてきたのである」⁵⁾と述べている。お互いをつなげている感情は、たかさんの立場にある人々が、お互いがもっている愛であるとフレーベルは指摘している。私自身、子ども達全体に対しての愛、一人ひとりに向けている愛などがある。愛という感情が、私と子ども達を結ぶ感情である。愛が芽生えるためには、共同的な集団を形成し、一つの大きなグローバル化をしなければならない。フレーベルは、グローバル化のきっかけとして部分的全体の発想を提供している。部分的全体とは、「全体の中にあるものは、全体の最小の部分にも同じようにあるということ、全体としての人類の中にあるものもまた、最も若い、最も若い人類の、子ども達の中にも既にあらわれているということ」⁸⁾とフレーベルが確認しているように、神の創造した「大宇宙」(der Makrokosmos)と同等の「小宇宙」(der Mikrokosmos)が人間に内在しており、大宇宙と小宇宙は有機的に関係し合っているとする発想であ



有機的共同体

る。一人の人間は、家族に属し、家族は、地域に属し、地域は、国に属し、国は、世界に属し、世界は、神の創造に属していると考えられることから、すべての万物は、神の創造をもとにした部分的全体として一個の宇宙生命体を構成していると考えられる。人間の身体細胞は固有の者であり、一つとして不用な細胞がないように、万物にも不必要なものは存在しない。すなわち、フレーベルの仲間の概念は有機的な発想を基盤としているのである。

自然有機体の概念を人間の身体を例に取って説明すると、人間は手や足、頭、腕などで構成されており、すべての部位は、血液で結びついている。自然有機体も各事物で構成されており、万物は神の精神が宿っている。部分的全体においても同じことが言える。部分的全体は、一つ一つの万物から全体を構成しており、すべての万物を結びつけているのは、共同感情である。つまり、自然有機体の概念と部分的全体の発想は、集合生命体という観点から類似している。

「私自身は部分的全体であり、人類という全体生命の部分なのです。私は人類の部分的全体であり、だから、私は人間であり、完全な人間なのです。ツポミに樹木の本質の全体性と樹木の発展の全体性があるように、私は人類の生命樹のツポミなのです。私の本質を形成し、私の中にも息づいている全体生命のように、私は私ですが、孤立してはいないのです。だから、私の最内奥の本質としての全ての生命を私の中から外へ生かすことが私の指命なのです。しかし、私は全体の部分でもあるから、私は部分であると同時に全体であり、人類の部分的全体であり、したがって、私の生命は完全な生命なのです。だから、私の中で人類の完全な全ての生命を私は生き、私は完全に生命に満ちた人類を生きるのです」⁽⁸⁻¹⁰⁾とフレーベルが述べているように、万物一つ一つが不可欠であり、全体を作っている一部として不用なものはない。自然有機体は合意のもとにまとまっている。自然有機体では、人と人をつなげているのは合意という生命の活動で述べられており、部分的全体にある人間関係では、共同感情という生命の活動によって人々が結びついていると言える。

子どもが生命の活動を行うには、同じ目標や共に目指す基準が必要となる。フレーベルは、人間の創設者である神につながる感情が存在すると述べている。日頃から子どもの行動や考えは、神から受けた使命として、人間が外界へと表現する行為である。子どもの行動や考えは、芸術家の精神が作品に反映されるように、神の創造的、建設的な精神を作品として反映するための使命活動である。模倣活動の創造的、建設的な要素が、対立するものを調和していく作用を現すことが自然の摂理の確認となる。お互いの中にある感情をふくらませていくことによって、思いやりの感情の萌芽へとつながっていくと直感した。万物の形成者である神に導かれるつながりは、お互いをつなげる共同感情に結びつけることができるのである。共同感情にてつながれた感情は、神の精神にある「人類の使命」(die Bestimmung des Mensch)で確認することができるのである。

4. 教育の現場から萌芽する共同感情

フレーベルは、「すべてはまさに人間として、一つの純粋に人間的な全体において包容し、また、「最も純粋な人類の祝祭、真の人類の祝祭、真正な人間主義の祝祭として つま

り、多様な民族や国民が判る言葉を使用するなら] 光と熱の一つの焦点のように、真と善、平和と喜び、尊敬と愛、誠実さと冷静に熟慮する生の育みとを、この現象はこの一つの夕方の祝祭と明け方の祝祭へと統一する」⁽⁷⁻⁹⁾と述べており、高い精神統一を通して、目標を開花させていくことができることを指摘している。万物の統一した内面には、「人間教育」の真の発芽点や中心があると考えられ、さらに人類の教育の基礎には、人類と「人道」(der Humanismus)の統一が行われなければならないと言える。しかし、教育の現場から、フレーベルの共同感情を実践として取り入れていくことが難しい。教育の現場では、互いが思いやるように、互いが互いのことを考えて行動するようにと教授的な実践が展開されているからである。人間の手によって強制的に曲げられた実践である。いうなれば、盆栽のように育てられた子ども達である。実際、今年度から5年生に導入されたピア・サポートが良い例である。教育関連関係から出されているピアサポートとは、「個人の関わり合いの中から下級生をお世話していく能力を養う実践」である。「ピア(peer)とは仲間」を意味し、「サポート(support)とは支え合い」を意味している。ピア・サポートの背景には、『「子どもは子どもの中でこそ育つ」という観念に立ち、子ども同士が互いに支え合い育ちあう場として学校を再生するプログラム』と考える傾向があり、下級生のお世話や他者との関わりをプログラム化によって教え込んでいこうとするものである。教育の現場においては、教師や教育関係者は、何事も教材化することを目指し、すべてのものに目標や目的、めあてを明確にして、子どもに教育実践を提示することが義務付けられているようで、もちろん人間の発育関係も目標や目的化をしないとイケないという状況にある。そこで、出てきたのがピア・サポートと考えられる。

現代の教育においては、互いが交わる機会を他者から分け与えられなければ、年下の人間に何もしてあげられないと考えている。確かに、低い段階から高い段階へと発達段階に応じてカリキュラムを組み、確実に正確に他者との関わりを機械的に与え、機械的に他者との関わり方を身に付けることができるとしても、感情のない、気持ちが通じない共感性のない交わりが行われる。機械的な交わりから、いかにして他者を思い、他者の必要なことを感じ実践することができるのであろうか。強いて言えば、逆に感情のない交わりから、使命感、強要的な責任感に充ちた活動が表現されると言える。つまり、共同感情からなっていない集団統制は、子ども達にとって義務感を湧かせ、自己の試行錯誤をした結果から萌芽したものではなく、逆に子どもの精神にとってストレスを溜め、害になる実践ではないと言える。

本来思いやりは、子ども同士がもっと所属している部分で身近な存在と共感仕合い、互いを感じる全体を感じられるようになり、一つの共同感情を萌芽させることが必要である。したがって、強制的な実践よりも、日常の遊びや日頃の活動で子ども同士が関わり合いをたくさん持ち、感情を交換する関わりを持つことが大切であると言える。

5. 共同感情に関わる保育士(教師)の援助

現在の学校の教育制度は、教師の思惑が充ち過ぎている小手先の改革が多い。子ども自身の内的・外的伸張による活動で、思いやりを萌芽させるどころか、互いの感情を交換することもできず、共同感情を持つことなど到底無理なことである。子ども自身から思いや

りを萌芽させるためには、やはり的確な保育士の支援が必要となる。

保育士（教師）支援の一つとして、「保育士がいかにかに子どもの目線に自分をおく」ということがある。日常生活の中で子どもに保育士自身が大人という概念を離れ、子どもと正面を向かい合って生活を過ごすことである。よく子どもとの基本的な関わり方と言われる方も一番難しい支援であろう。私達大人は、立場から保育士・教師・大人というしがらみに巻き付かれており、頭では判っていても行動には起こせないからである。「保育士だから」、「教師だから」、「大人だから」などという建前は子どもの前では通用しない。子どもと日常から生活を共にしているのならば、子どもの考え、子どもの感覚的な交換、子どもの行動、子どもの真の姿を自分が感じ、子どもと共に感覚を交換していくことが必要となる。子どもと真剣に向かい合ったときに、子どもは同じ土俵の上で、お互いに関わりを持とうとしてくる。その時にやっと、真の感覚交流から感情交流を始めることができるのである。つまり、保育士が同じ目線に立ち、自分を子どもと同等の立場におくことで、子どもは共同感情に気づき、思いやりが芽ばえるきっかけをもつことができるわけである。また、子ども同士の架け橋になることもできてくる。むしろ、小学校段階でも同様な支援が必要であると言えよう。また、保育士の支援の二つ目として、共同感情に気づける環境的配慮も当然のように必要となる。私が勤務している小学校では、学年を縦に分けた「仲良し集会」と言うものがある。クラスの子どもの2人から3人に分け、全校を24班に振り分けて交流させようとする行事である。集会においての活動は子どもが決めるのだが、人の分配や集会での活動の調整などは、教師主体でおこなわれる。つまり、子どもの主体的な活動は、活動の提案しかないのである。結局、教師の思惑しかない行事になっている。異年齢同集団を作為的なもので形成させているならば、その場だけでしか交流はできない。ゆえに、子ども同士が真に感覚や考えを交流することはできないことになる。異年齢同集団は、作為的ではなく普段の子ども同士の関わりから生まれてくるものなので、子ども自身で集団を形成することが必要となる。ある地域では、異学年の子ども達が自分達で異年齢同集団を形成している。身近な地域ということもあるが、理想的な子ども自身で集団形成をしている。したがって、集会という行事的活動ではなく、日頃の活動の関わり合いを充実させ、子ども同士が交流できる（幼稚園では）環境（小学校では時間割や学習）を設定していくことが大切であると考え。つまり、教師も含めた共同体に子どもの目線に立つことから感覚感情交流を行い、共感できる環境を持たせ、共同感情を発展させることにより、お互いの痛みや喜びを感じられる思いやりを自然に萌芽させることができるのである。それゆえに、クラス内での友達同士、教師と子ども、異年齢同集団が形成される子ども自身の活動を大切にできる生活環境を、保育士は常に配慮しなければならないと言えよう。

6. 終章おわりに

人間は、絶えず生成進行し、発達していく存在である。子どもは、自己との合一において自己を高め、世界への合一を行うことにより、万物との関係を確認し、明瞭にしていく。最終的に神に憧れ、神への合一のために人間は、生命合一を使命としていることに気づく。生命合一によって人間は、自分自身の生命化をはかり、より高い水準の精神統合活動を行っていくことができる。高い水準の精神統合から共同感情に気づき、お互いを理解し合え

ることができるのである。お互いを理解し合えたとき、人間は思いやりを萌芽することができるのである。つまり、現代の教育で行われている人間の心を機械的に豊にしていこうという考えではなく、生得的に豊かな心をもっている子どもの潜在的な力をフレーベルの「人間の教育」を実践することで萌芽していくことが必要であると言えよう。子どもに思いやりがないなど言う人がいるが、そうではない。思いやりはすべての子どもが潜在的に持っている。潜在的な思いやりをいかに子ども自身が身に付けていくかという過程が大切と考える。したがって、保育士や教師は子どもの伸張を型にはめ、ねじ込んだような実践での思いやりの発達ではなく、子ども自身が子どもと大人、その他の人々や自然と関わりながら共同感情に気づき、人間性である思いやりを萌芽させていくように支援をしていく必要がある。

<引用・参考文献>

1. 新・教育心理学事典 依田 新 監修 金子書房 1997年6月10日
2. 現代保育用語事典 岡田 正章・千羽 喜代子他 フレーベル館 1997年2月3日
3. 哲学事典 編集兼発行者 下中 邦彦 平凡社 1971年4月10日初版第1刷発行
1981年9月20日初版第12刷発行
4. キリスト教大辞典 日本基督教協議会文書事業部 キリスト教大辞典編集委員会教文社 昭和38年6月30日
5. 「教育の弁明」フレーベル全集（1）Friedrich Froebel 小原國芳・荘司雅子 監修
玉川大学出版部 昭和52年6月1日
a. pp. 340. L3-L7
6. 「人の教育」フレーベル全集（2）Friedrich Froebel 小原國芳 訳
玉川大学出版部 昭和51年9月20日 初版発行
a. pp. 53. L6-L17
b. pp. 51. L14-L16
c. pp. 26. L16-pp. 27. L2
7. 「教育論文集」フレーベル全集（3）Friedrich Froebel 小原國芳・荘司雅子 監修
玉川大学出版部 昭和52年12月1日
a. pp. 15. L5-pp. L7
b. pp. 267. L6-L7
c. pp. 50. L16-pp. 51. L3
d. pp. 53. L9-pp. 54. L1
e. pp. 16. L16-pp. 17. L3

- f. pp. 57. L1-L4
8. 「幼稚園教育学」フレーベル全集（4）Friedrich Froebel 小原國芳・荘司雅子 監修
玉川大学出版部 1981年4月8日
 - a. pp. 503. L14-L16
 - b. pp. 679. L9-L16
 9. ペスタロッチー・フレーベル事典 ペスタロッチー・フレーベル学会 玉川大学出版部 1996年12月25日
 10. 道徳教育論－価値観多様化時代の道徳教育－ 中村清 著 2001年4月25日 東洋館出版社
 11. Eduard Spranger 著 『*Aus Friedrich Frobel's Gedankenwelt*』 Quelle & Meyer. Heidelberg 1953
 - a. S. 33. Z. 5 - Z. 15